教室の窓辺

音読を積み重ねて

みよし市立黒笹小学校 教諭
鈴木 晶子

「もう一回、音読やりたい」

本校では、「共に学び、高め合う子どもの育成」をめざし、国語科において『音読』を重視している。豊かな音読表現ができるよう指導することで、一つ一つの言葉を感じ取り、考える子どもに育てようと、全職員で取り組んできた。国語科の授業の始め10分間は、さまざまな方法で音読に集中する。

まず、「バラバラ読み」で全員がそれぞれのペースで声を出し、発声練習をする。続いて、全員が一人一文ずつ担当し、席順で読みつなげる「ヘビ読み」をする。さらに、数行ずつ分担して読む「代表読み」で、みんなの前で自信をもたせる。そして、一時間の授業の終わりには、その時間の読みの深まりを音読で表現する味読をめざす。

今年は、一年生担任。

音読の基本を教える重要な学年である。音読のポイントとして「大きな声で」「はっきりと」「『、』や『。』はあけて」「出てくる人になりきって」の四項目を提示した。一人一人の音読を教師が褒めることで、小さかった声はだんだん大きくなり、自信をもつようになってきた。大きな声で読める子は、さらにどの言葉にどんな気持ちを込めたらよいのかに着目し始めた。大切な言葉（伝えたい様子や気持ちを表している言葉）に着目した表現方法を褒めることで、自分で考えて表現する児童になっていくことを実感した。

授業の中で、分からない言葉を出し合い、言葉の学習をし、動作化で理解し、子どもたちの意識から課題を設定し、話し合う。そんな単元展開の中で、音読は、どんどん深化していく。

十二月に実践した「スイミー」の学習では、お話の世界を楽しみ、「音読で、スイミーになりきると楽しいから、もっとやりたい」と夢中になって音読をする姿が見られた。体をゆすりながら音読する子、暗記してすらすら読み得意げな子、代表の子が読む文を指で追いながら聞いている子の表情も、文脈に合わせて変わってくる。

今年は、コロナ禍の中で、二人組で近づいて交代で読み合ったり、大きな声を出したりすることが憚られる状況であった。しかし、声を出すからこそ気づき、読みが深まる、そんな音読を積み重ねてきた。これからも音読を生かし、共に学び、高め合う子どもを育てていきたい。

出てくる人になりきって

音読指導に重点を置くことは、いわゆる「本校の当たり前」のひとつです。教室での音読は、自分の読みだけでなく、友だちの音読を聴きながら、文章を目で追い、耳から音声が入ることでイメージがふくらみ、読みが深まります。

音読は、すらすらと読めるだけではなく、一つ一つのことば（描写）や主人公のセリフをその子なりに読んでいくことが、基本中の基本です。一年生の教室で子どもたちと一緒に、音読をしている鈴木教諭の取り組みを支えていきたい。

（校長　吉野　嘉郎）